

鹿乗川流域遺跡群南群の検討(2)

● 宮腰健司

鹿乗川流域遺跡群南群の弥生時代～古墳時代前期の遺構についての検討を行い、大型墓を含む墓域を伴う下懸遺跡、大型区画・竪穴建物を伴う寄島・姫下遺跡の変遷を考察した。

1. はじめに

先年度の『研究紀要第 20 号』「鹿乗川流域遺跡群南群の検討(1)」(宮腰 2019: 以下、前稿とする)では鹿乗川流域遺跡群南群の古代～中世の様相について検討を加えた。本文では同じく鹿乗川流域遺跡群南群の弥生時代～古墳時代前期の遺構について考えていきたいと思う。

ただ本文に入る前に前文について若干の補足を付け加える。

A 地区惣作遺跡では、前稿図 5 に示した区画部分の西にある惣作遺跡 09B 区の中央部で、ほぼ南北に走る 018SD から底部外面に「寺」と墨書された須恵器無台杯が出土している。この墨書土器は、は木簡や鑄造関連遺物などと伴に、寺領廃寺との関連をより強く示唆する資料となる(永井 2011)。

B 地区の寄島遺跡 11C 区(図 1)の南で検出された床下周溝をもつ 037SI は、灰釉陶器が出土し、当該期の竪穴建物とも考えられるが、この場所は下懸遺跡の居住域にあたっており、037SI は弥生時代～古墳時代前期の建物で、遺構が重なっている可能性も考えられる。どちらにせよ古代～中世には凹地となっていた旧河道に近い低地部にあることや、同方向の溝がいくつか集中して重複する遺構があることから、古代から中世にかけて耕作地・水田が作られた時期があると推定される。この立地は、姫下遺跡の 06C 区の低地部に展開すると水田と想定した地点、前項図 8 と類似しており、両者とも北東から南西へと流れる河道の左岸、南側に位置する。

図 2 は C 地区姫下遺跡の耕作地・水田域と

想定した遺構群である。特に 06A 区北半部や 06B 区北東部では同方向の方形・不定形土坑や溝が集中して重複しており、各遺構とも概ね深さが 10cm 以下である。他の耕作地・水田とした遺構群と同じく、出土遺物などの明瞭な根拠があるわけではないが、やや高い地点にある 05A 区の居住域・竪穴建物群と比べると、低地部にあたる場所に広がっている。また遺構の配置に関しても居住域とは異なっている。

2. 弥生時代～古墳時代遺構の検討

前稿でも述べたが、本文では刊行された報告書に弥生時代～古墳時代前期の遺物が掲載されている遺構を抽出し、その遺構の時期を決定した。そのため遺物が出土しない遺構や出土土器が小片で時期決定が不能な遺構については取り上げていない。また遺物図が掲載されていないものでも、文中に同期の遺物が出土したという記載があるものや遺構配置などで明らかに同期と考えられる遺構は検討の対象に加えている。

対象は平成 28 年度の調査までとしたが、愛知県埋蔵文化財センターの平成 26・28 年度調査については、報告書が未刊行であるため、同センターの『年報 平成 26 年度』『年報 平成 28 年度』の遺構図のみを用いている。そのため時期については不明である。また碧海台地上の加美遺跡の調査成果も加えている。

(1) 時期区分(川崎ほか 2013)

- I 期 弥生時代前期～中期中葉
：櫛王式期～瓜郷式期
- II 期 弥生時代中期後葉
：古井式期～長床式期
- III 期 弥生時代後期

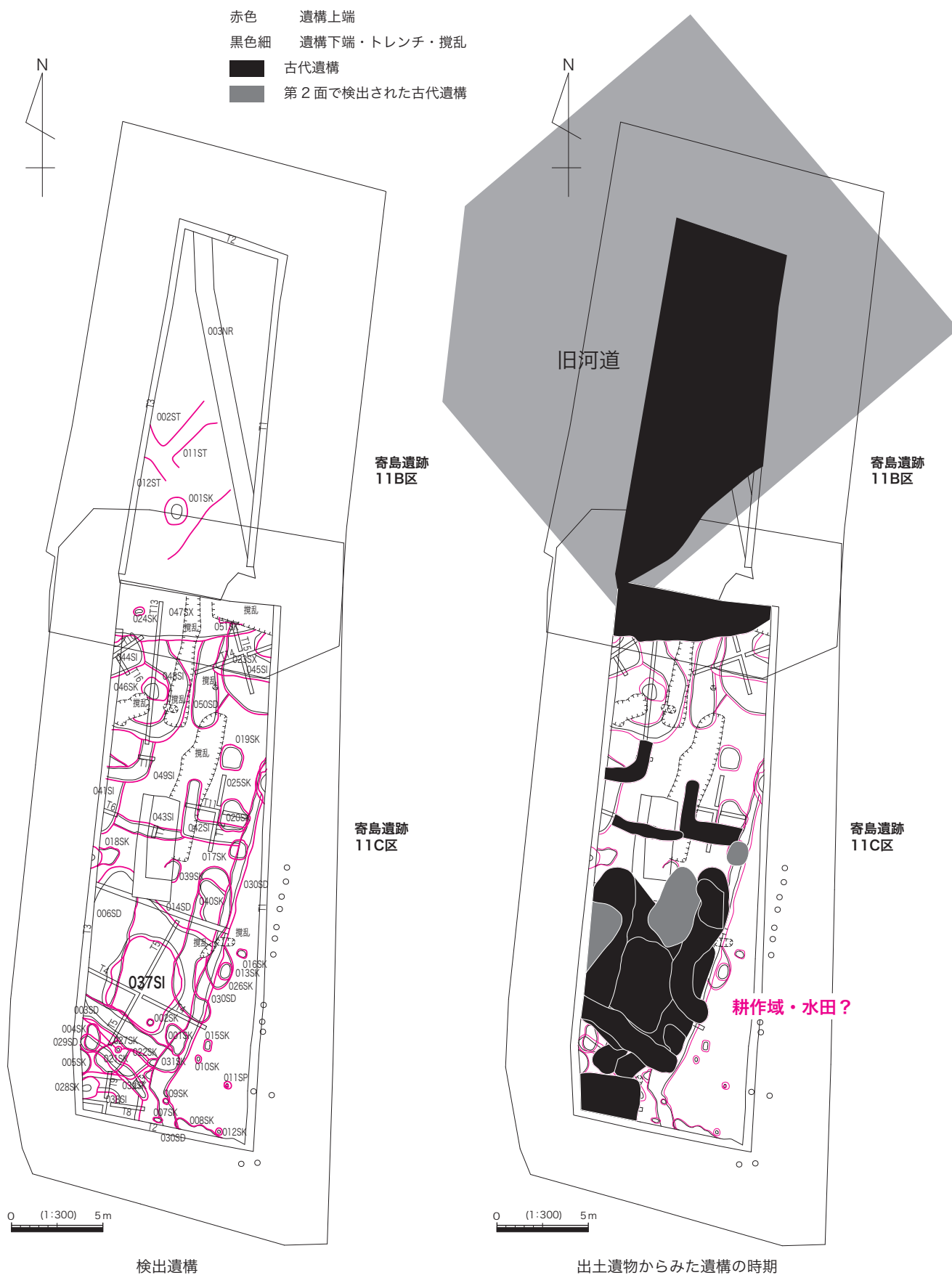


図1 寄島遺跡 11B区・11C区古代～中世主要遺構 (1/300)

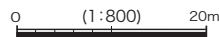


図2 姫下遺跡 06A 区・06BB 区・05A 区古代～中世主要遺構 (1/800)

- ：八王子古宮式期～山中式期
- IV期 古墳時代早期 1
 - ：廻間Ⅰ式：欠山式期～廻間Ⅱ式：元屋敷式期古段階
- V期 古墳時代早期 2
 - ：廻間Ⅲ式期前半：元屋敷式期新段階
- VI期 古墳時代早期 3～前期
 - ：廻間Ⅲ式期後半：元屋敷式期新段階～松河戸式期：神明式期

本文では、上記のようにⅠ～Ⅵ期に時期区分して、遺構の変遷を考えていく。なおⅤ期とⅥ期については、屈折脚高坏の出現期とそれ以後の定着期で区分している。

(2) 変遷

Ⅰ期 (図3) 弥生時代中期前半には惣作遺跡では居住域と土器棺による集落が形成される。また下懸遺跡や寄島遺跡にも集落が営まれていた可能性があるが、惣作遺跡のような規模ではないと推定される。さらに中期中葉頃から後葉にかけては、旧河道の流量が増大して、集落が途切れる、または崩壊するような状況が生まれていたと考えられる。

Ⅱ期 (図4) 弥生時代中期後葉にかけて、旧河道の流量は次第に少なくなっていく、Ⅱ期の間には再び集落が営まれるようになる。中心となる集落はⅠ期と変わらず惣作遺跡で、居住域と土器棺の組み合わせが確認でき、下懸遺跡でも同様の集落が想定される。さらに台地上の加美遺跡では、方形周溝墓2基が検出されており、低地部の遺跡との関連が問題となる。

Ⅲ期 (図5) 弥生時代後期にも引き続き惣作遺跡と下懸遺跡に集落が形成される。ただ下懸遺跡の規模の拡大が顕著であり、威儀具である装飾甲の出土にみられるように、中心集落としての役割を果たしていた可能性がある。

Ⅳ期 (図6) 古墳時代早期になっても惣作遺跡と下懸遺跡は継続するが、明らかに下懸遺跡が中心となる。下懸遺跡は旧河道を挟んで北と南に墓域、中央に居住域という集落配置となる。北墓域に関しては、寄島遺跡にも住居が営まれているため、寄島遺跡の墓域とも考えられるが、住居はかなり散発的であり、大型墓が存在することを考慮すると、遺構が集中する下懸遺跡に属するものと考えられる。また惣作遺跡

では、旧河道で特徴的な惣作型甕 (宮腰 2017) がまとまって出土しており、遺跡の性格が問題となる。

Ⅴ期 (図7) 廻間Ⅲ式期：元屋敷式期新段階になると下懸遺跡は低調となり、寄島遺跡が中心となっていく。また姫下遺跡にも活動の痕跡が見られるようになり、惣作遺跡ではわずかに遺構が検出されるのみとなる。

Ⅵ期 (図8) Ⅴ期以降、Ⅵ期古墳時代前期にかけて、寄島遺跡・姫下遺跡では遺跡が継続する。ただ寄島遺跡では居住域内では遺跡が集中する地点が北へ移動する傾向がある。鹿乗川流域遺跡群南群でまとまった遺構が検出されるのはⅥ期前半の松河戸Ⅰ式期：神明Ⅰ式期まで、後半の松河戸Ⅱ式期：神明Ⅱ式期にはわずかに住居跡などが検出されるだけとなる。

(3) 各遺跡の様相

次に古墳時代早期～前期に中心となる下懸遺跡・寄島遺跡・姫下遺跡について見ていく。

下懸遺跡

下懸遺跡の遺構配置は旧河道を挟んで北と南に墓域、中央に居住域が配置される (図9)。

居住域 (図10) の中は大きく4地区 (a～d) に分かれ、b区・c区が中心となる。b区には篋被付五角形銅鏃と小型鉄製品を出土した土坑00D区SK25や13C区の062SD・063SDがある。062SD・063SDについては長さ5.3～5.7m、幅0.43～0.47m、深さ0.16～0.21mを測り、062SDより土器もまとまって出土している。この溝群は、遺物がほとんど出土しない周辺の並列溝群とは、規模も様相も異なるが、布掘り建物にしては柱穴がなく、梁間も短いので不明遺構としか認識できないものである。c区では、時期の確定に問題は残るが、南東部に総柱掘立柱建物00C区SB21がある。a区は遺構がやや散漫であるが、削平された可能性がある。下懸遺跡00E区では、SK54出土の白玉や土製勾玉が見つかった。d区 (図13) では土器集積が認められ、内面に赤色顔料は残る小型鉢の出土が特徴的である。また方形周溝墓状の遺構SZ01～03もある。

北墓域は寄島遺跡として調査された、旧河道の北側にあたる地点で、Ⅳ期に居住域から墓域へと変わったと考えられる。墓は大型の

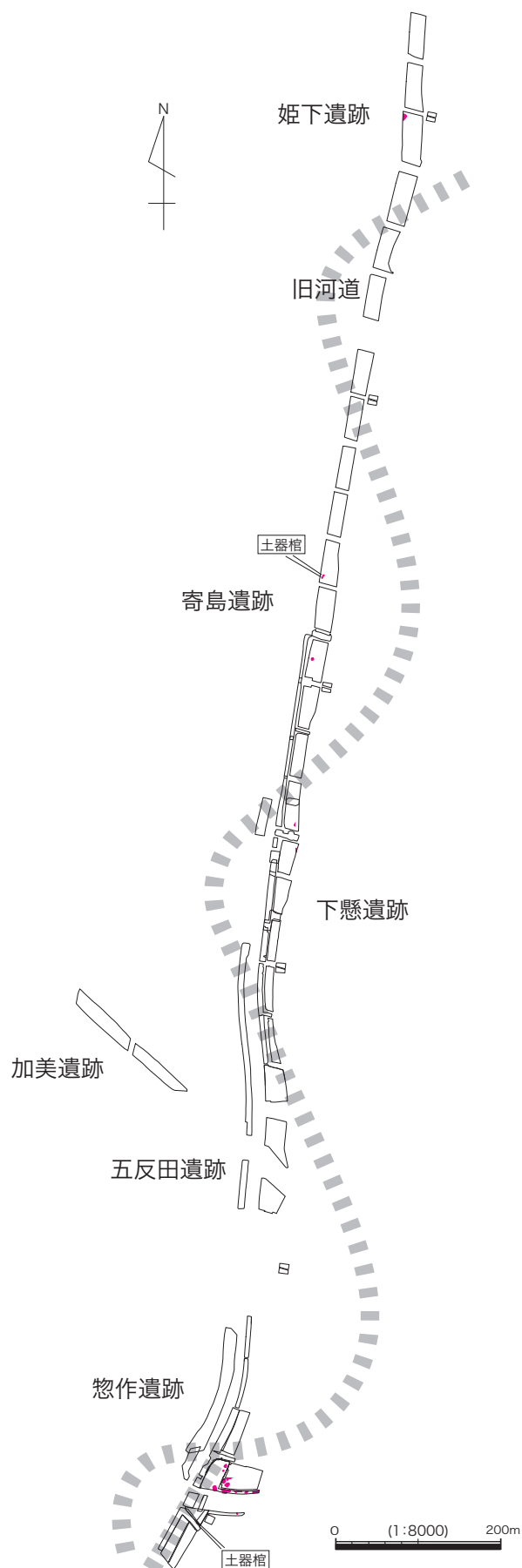


図3 I期 弥生時代前期～中期中葉 (1/8,000)
：櫛王式期～瓜郷式期

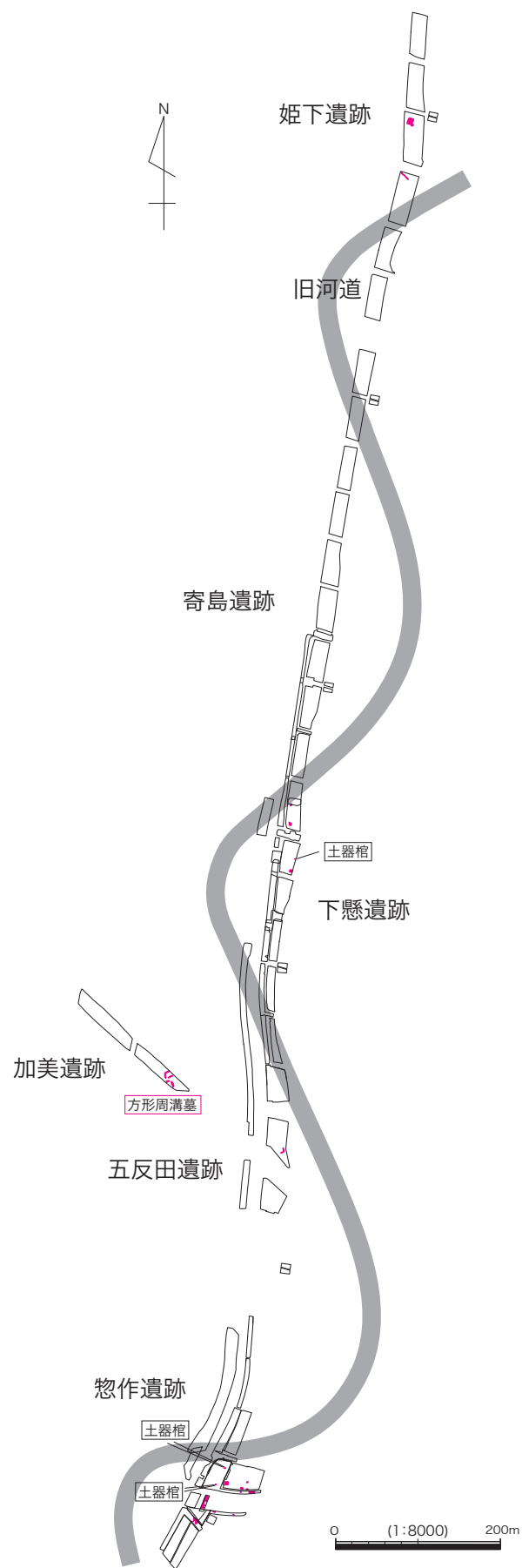


図4 II期 弥生時代中期後葉 (1/8,000)
：古井式期～長床式期

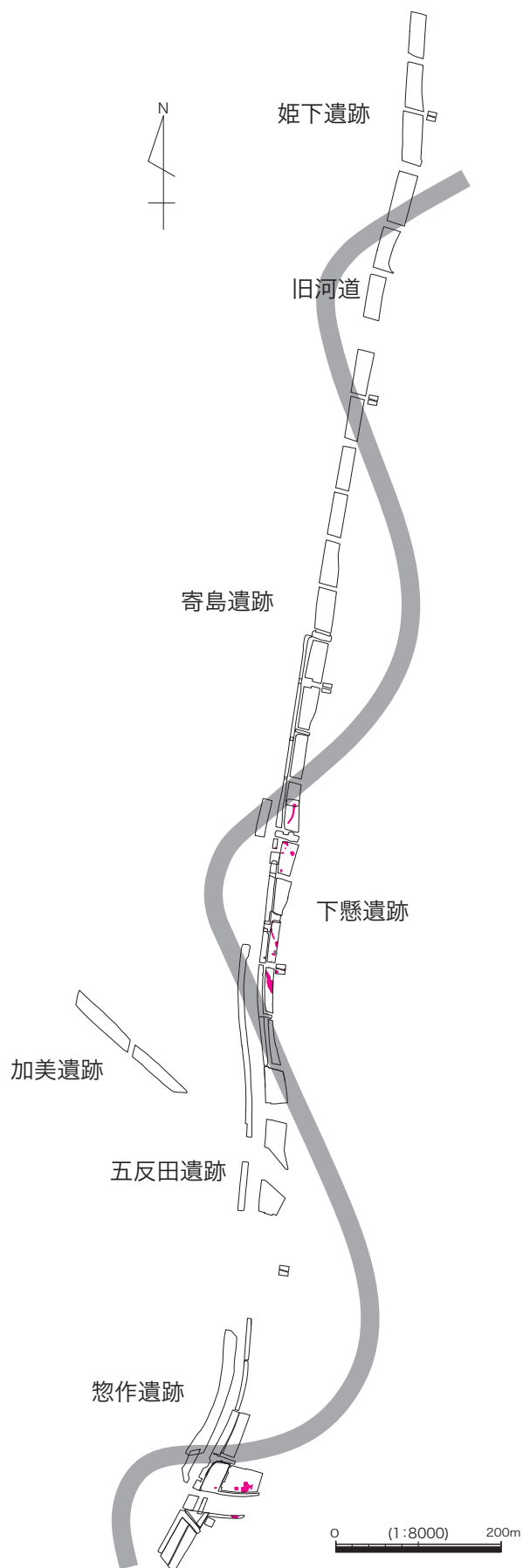


图5 Ⅲ期 弥生時代後期 (1/8,000)
：八王子宮古式期～山中式期

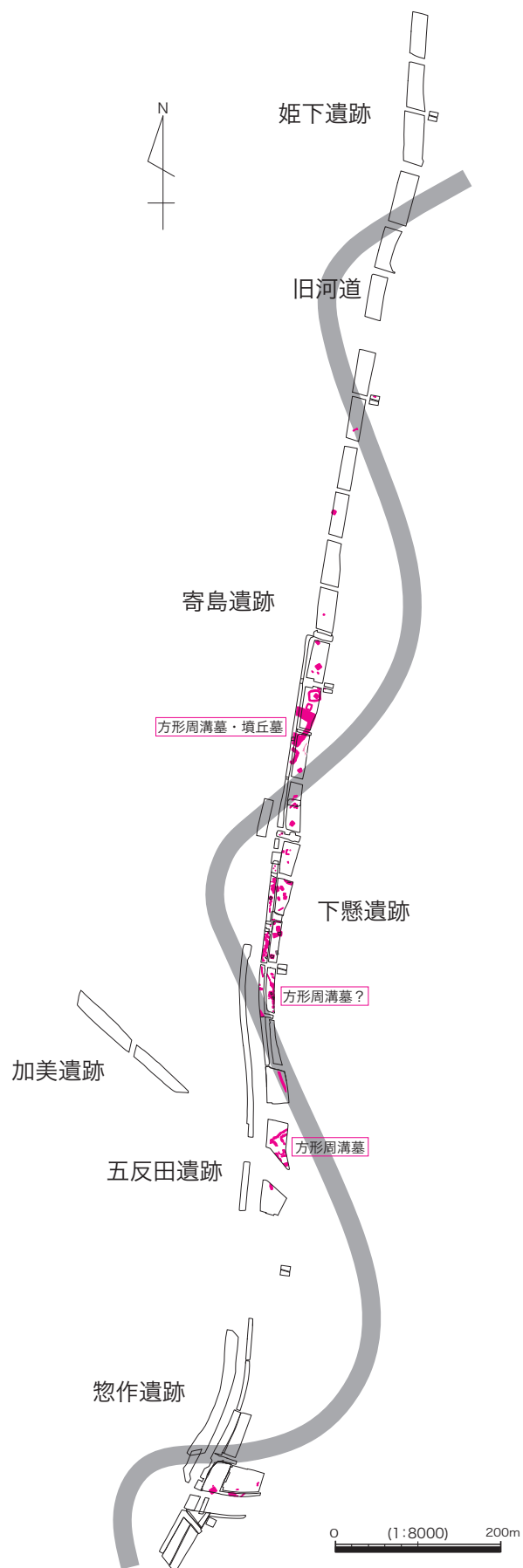


图6 Ⅳ期 古墳時代早期 1 (1/8,000)
：廻間Ⅰ式：欠山式期～廻間Ⅱ式：元屋敷式期古段階

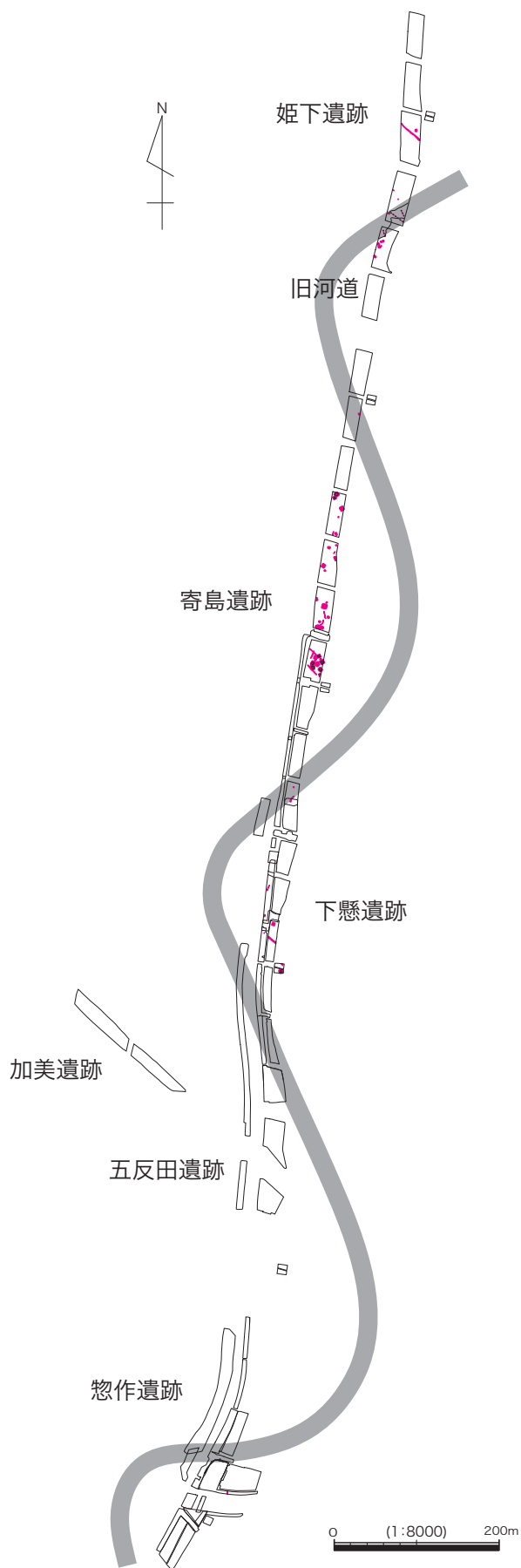


図7 V期 古墳時代早期2 (1/8,000)
：廻間Ⅲ式期前半：元屋敷式期新段階

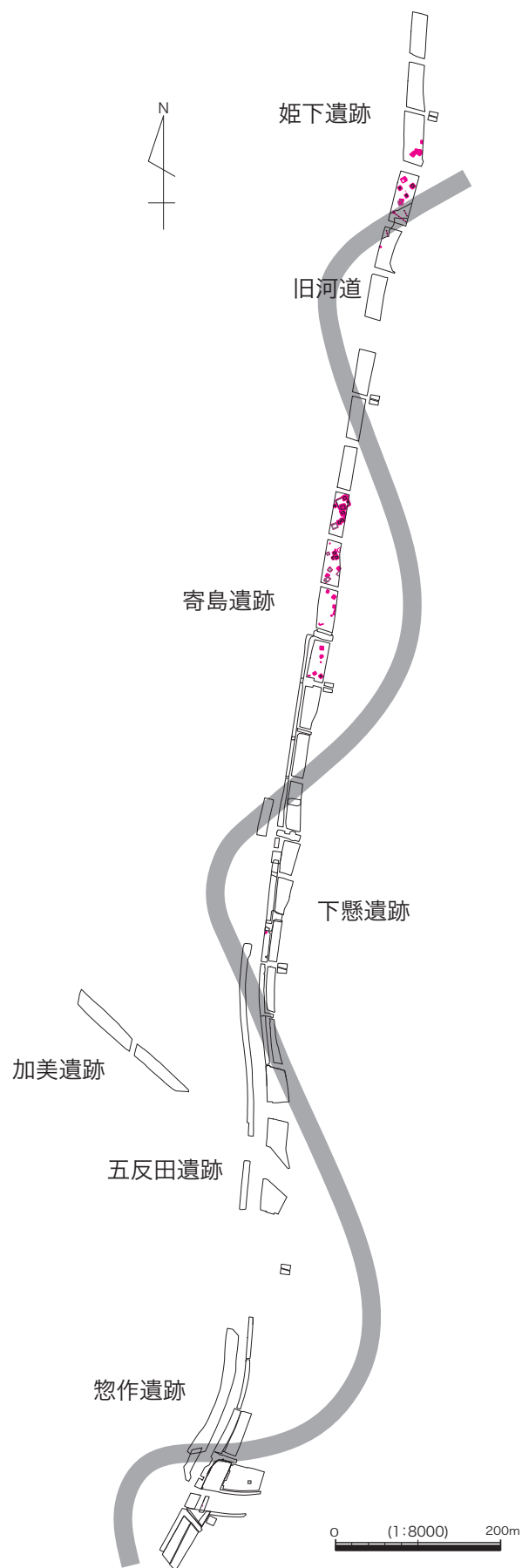


図8 VI期 古墳時代早期3～前期 (1/8,000)
：廻間Ⅲ式期後半：元屋敷式期新段階～松河戸式期：神明式期

029SZを中心に、外径で15m程の074SZと026SDが南に在る。北側の3004SDは029SZなどと同方向を向いており、墓の可能性が高いが、3003SDについては不明である。029SZは全長が南北約44m、墳丘部が南北約20mを測る。また北溝が幅約12m、深さ約0.5m、東溝が幅約5.5m、深さ約0.35m、南溝が約12m、深さ約0.3mを測り、断面形は皿状を呈する。この規模の墓を近隣で求めるとすれば、豊田市川原遺跡のSZ02があげられる(図12)。SZ02は、全長が東西約45m、南北約39m、墳丘部が東西約26m、南北約23mを測り、幅10m前後、深さ0.3～0.5m、断面形が箱型を呈する周溝が巡る。規模を比較すると、全長、墳丘長、周溝の径・深さなどいくつかの類似する点が見出せる。川原遺跡SZ02は八王子古宮式期に属しており、廻間Ⅱ式期と考えられる029SZとはかなりの時間の隔たりがある。ただ方形周溝墓が三河地域に定着した長床式期より、基本形態を大きく変化させることなく、少なくとも廻間Ⅱ式期までは継続することを前提にすると、両墓の比較・検討も可能であると考えられる(図11)。

寄島遺跡・姫下遺跡

寄島遺跡・姫下遺跡は旧河道によって南(寄島遺跡)・中(寄島・姫下遺跡)・北(姫下遺跡)地区に分かれる(図15)。

南地区の寄島遺跡(図16右)の北側には、幅1.1m・深さ0.2mの溝で囲われた、南北約14m、東西約16mの方形区画があり、この区画と前後して重複するように、径7mを測る竪穴建物を含む建物が連続して造られている。また、これらの遺構群の南には掘立柱建物群が並ぶ。寄島13A区が削平されていて不明では

あるが、この一帯が他とは様相が異なる場所となっていることがわかる。さらに北側の旧河道左岸斜面ではクスノキをくり抜いた井戸枿をもつ井戸13B区048SEが検出されている。

中央部では、径6.2mの竪穴建物1113SBから内面に赤色顔料が付着する小型鉢が2点出土しており注目される。

中地区の寄島・姫下遺跡(図16)も削平されていて不明な部分が多い。姫下遺跡14区では径11mの竪穴建物14区244SIが検出されている。報告書が未刊行のため時期など詳細は不明であるが、周溝状床下施設を伴っている。また北側の旧河道沿いには、井戸06C区249SEや土器集積06C区151SKが見つかったりしている。

北地区の姫下遺跡(図16左)では05A区SD42と旧河道に挟まれた場所が居住域となっていたようである。その中で注目されるのが、05B区SB02である。SB02は壁周溝が全周する竪穴建物で、建物が廃棄された後も周囲に浅い土坑が15箇所掘られ、炭化物層や焼土を含む土器廃棄が行われている。また時期は不明であるが南側に、ほぼ同じ方向を向く掘立柱建物SB45がある。さらにこの南の旧河道は、幅が狭くなっており、河道に直交するように杭列が打ち込まれている。

以上駆け足で鹿乗川流域遺跡群南群における弥生時代～古墳時代前期の様相をみてきた。遺構の時期については報告書のみで判断しており、本文はそれらから導き出された仮説にしかすぎない。この仮説を元にさらに出土遺物などを検討して、遺跡群の詳細な姿を明らかにしていくことが望まれる。

参考文献 下記の文献以外は宮腰2019に掲載した。

- 愛知県埋蔵文化財センター1989『加美遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 愛知県埋蔵文化財センター2015「下懸遺跡」「寄島遺跡」「姫下遺跡」『平成26年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』愛知県埋蔵文化財センター
- 愛知県埋蔵文化財センター2017「下懸・寄島遺跡」『平成28年度 愛知県埋蔵文化財センター 年報』愛知県埋蔵文化財センター
- 安城市教育委員会2014『姫下遺跡 大畑遺跡 長先遺跡』安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 安城市歴史博物館2014『大交流時代―鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前後の土器交流―』
- 川崎みどり・鈴木とよ江・浅岡優・西島庸介「鹿乗川流域遺跡群の土器編年」『変貌する弥生社会 安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム
- 嶋田奈緒子2013「L字状石杵について」『変貌する弥生社会 安城市鹿乗川流域の弥生時代から古墳時代』考古学フォーラム
- 永井邦仁2011「安城市下懸遺跡・惣作遺跡出土の木簡について」『研究紀要 第12号』愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司2017「第5章第1節 鹿乗川流域遺跡群の弥生時代後期から古墳時代初頭の「平底甕」について」『寄島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第204集
- 宮腰健司2019「鹿乗川流域遺跡群南群の検討(1)」『研究紀要 第20号』愛知県埋蔵文化財センター

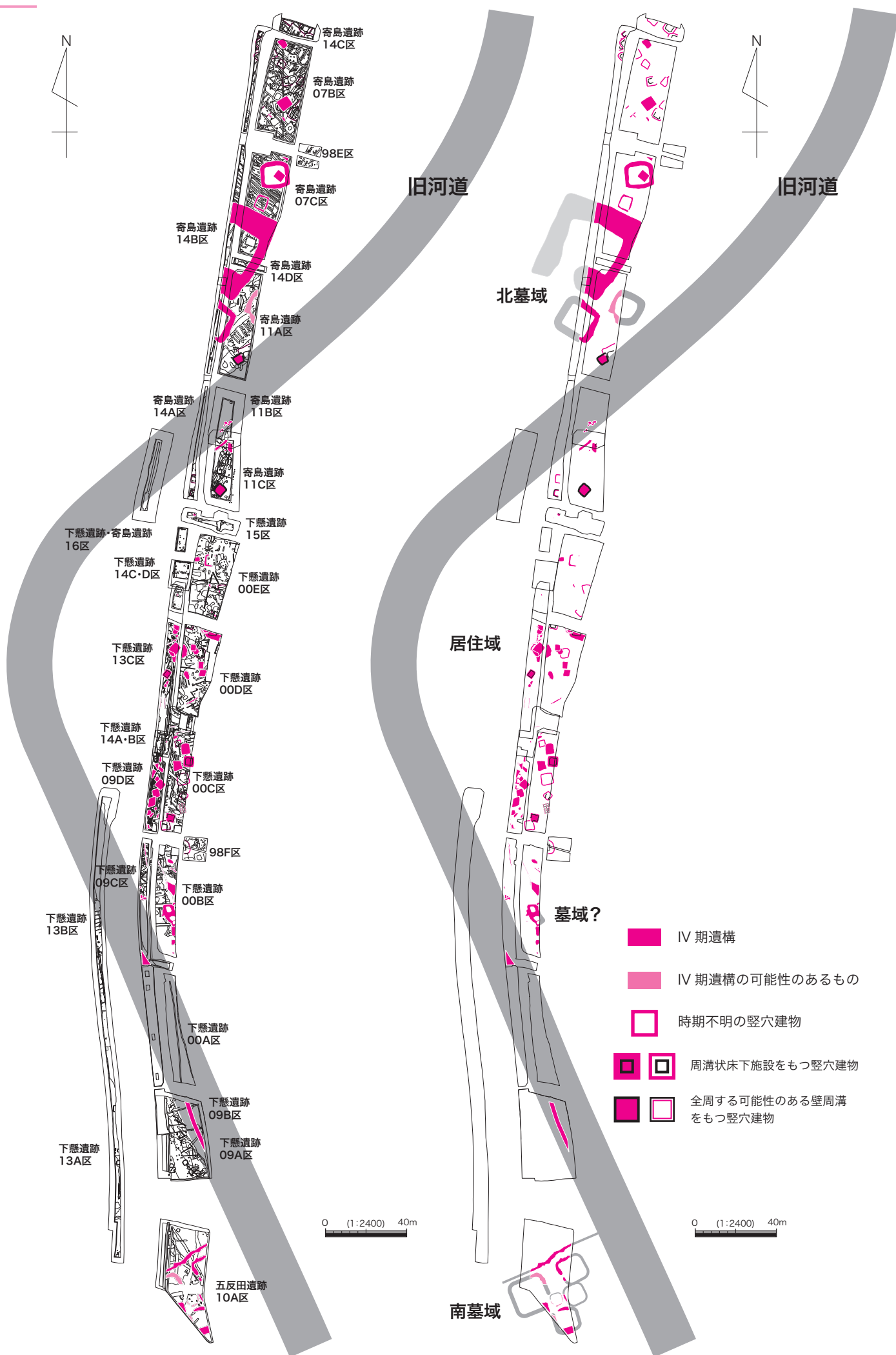


図9 下懸遺跡Ⅳ期：古墳時代早期1主要遺構 (1/2,400)

- IV 期遺構
- IV 期遺構の可能性のあるもの
- 時期不明の竪穴建物
- 周溝状床下施設をもつ竪穴建物
- 全周する可能性のある壁周溝をもつ竪穴建物

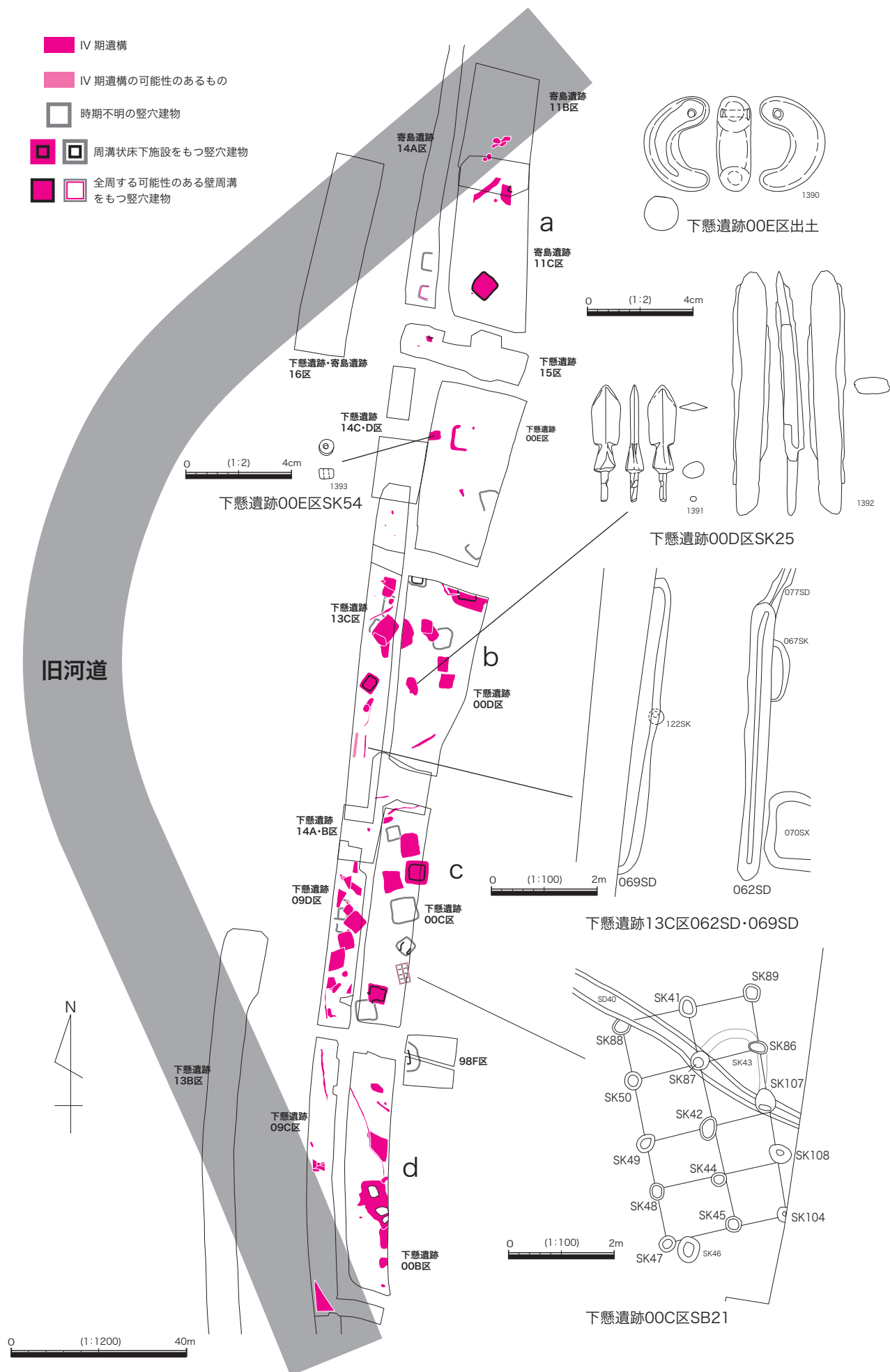
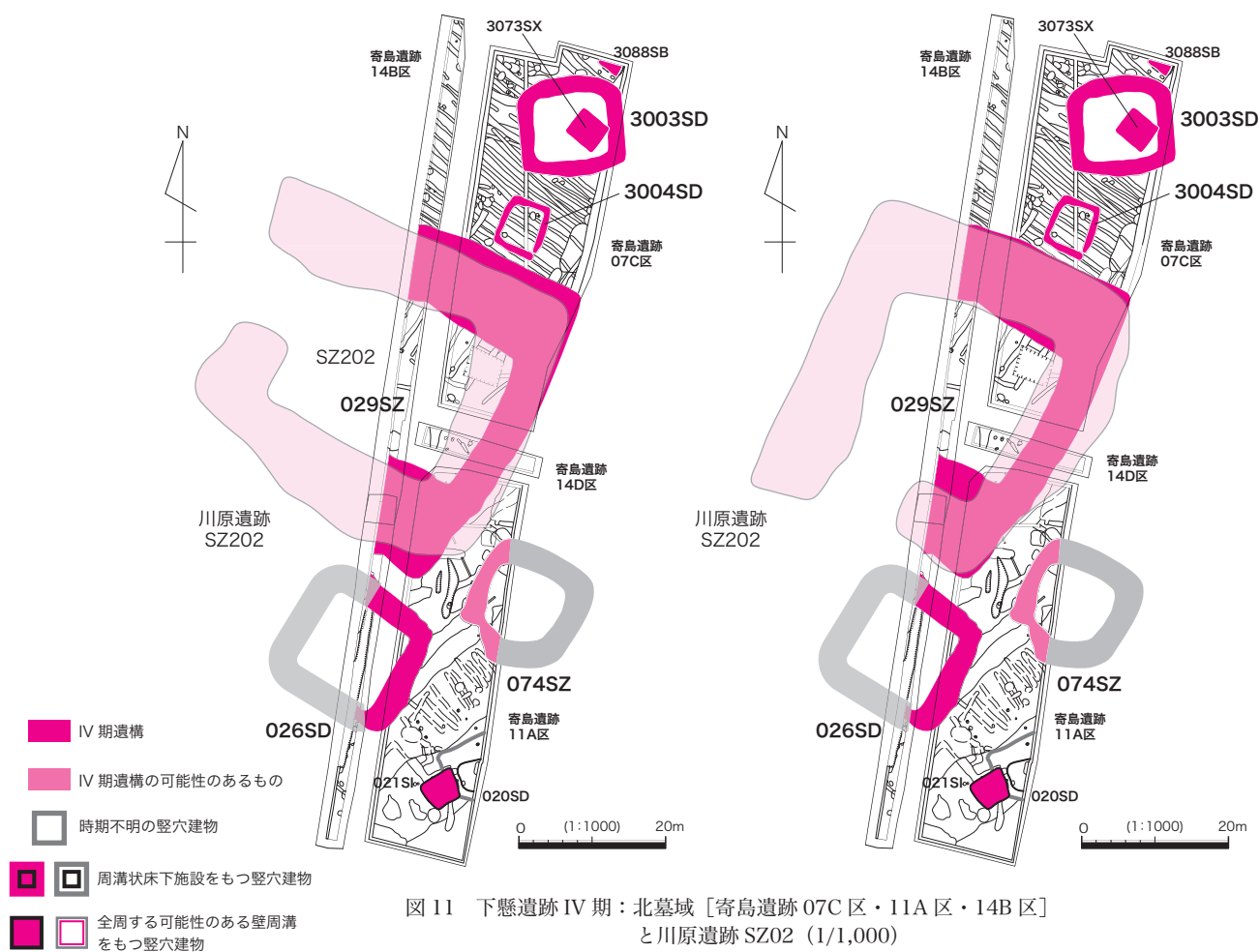


図10 下懸遺跡IV期：古墳時代早期1居住域主要遺構（1/1,200）



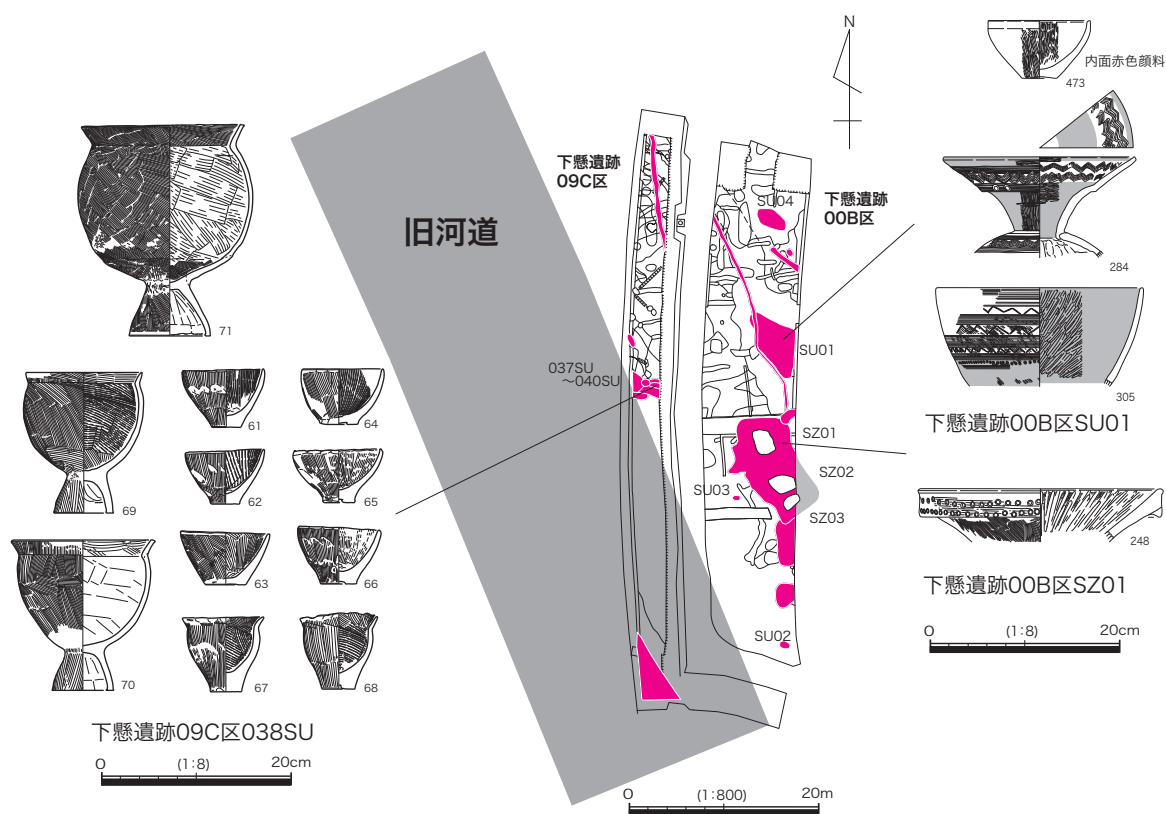


図13 下懸遺跡Ⅳ期：居住域南部（1/800）

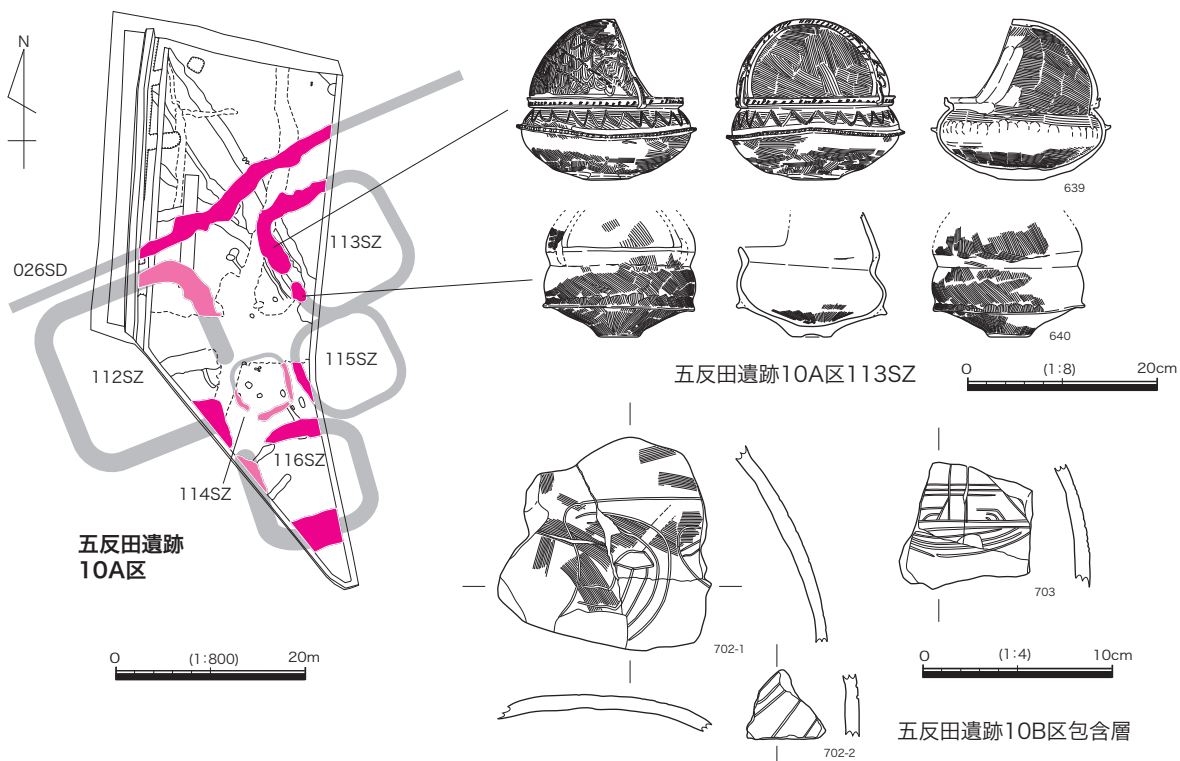


図14 下懸遺跡Ⅳ期：南墓域〔五反田遺跡10A区〕（1/800）

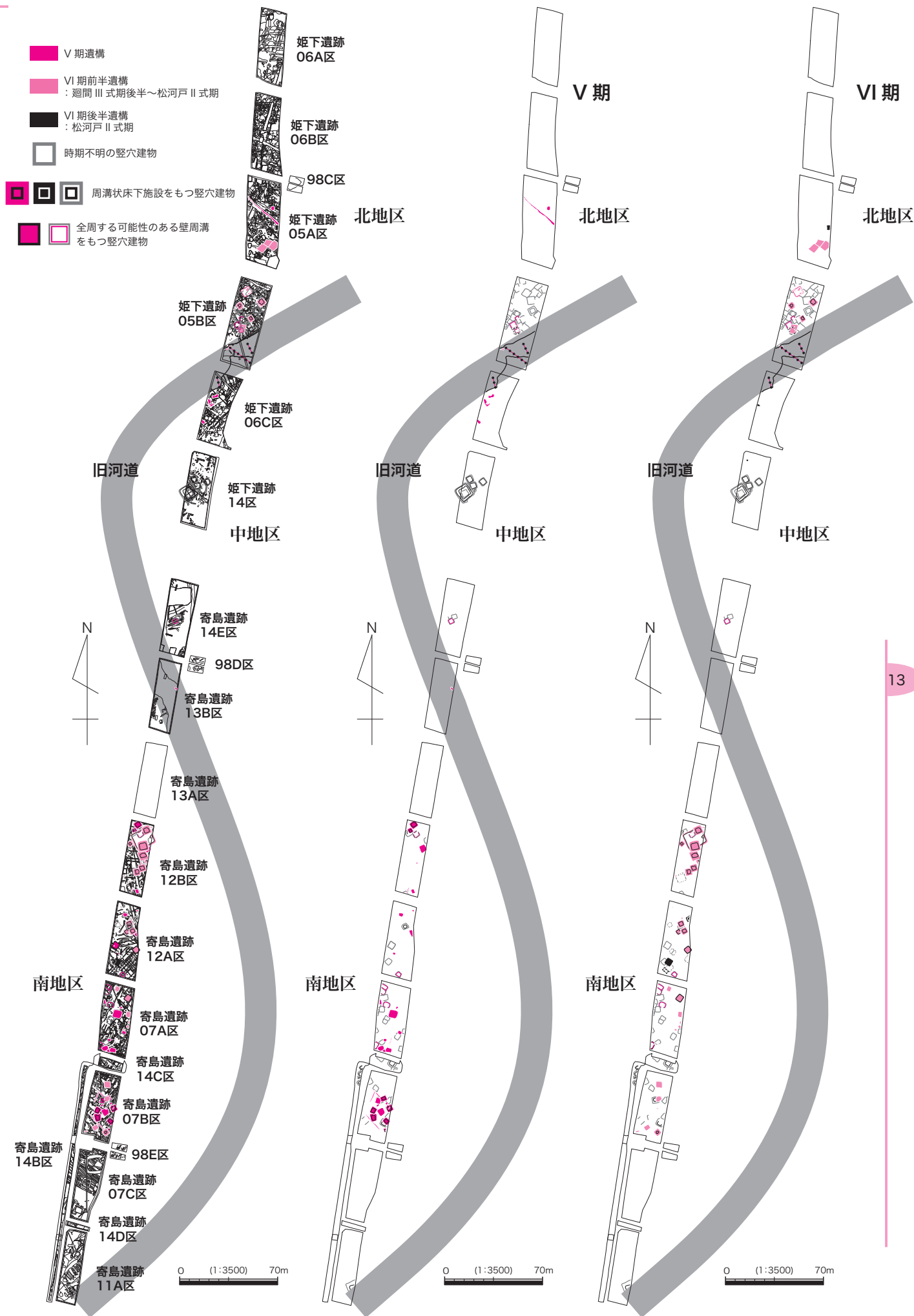


図 15 寄島遺跡・姫下遺跡 V・VI 期：古墳時代早期 2～前期主要遺構 (1/3,500)

